特集　多様な人材を生かす農業

農福連携は付加価値を生み癒し効果も

労働力不足に悩む農業と、働く場を探す福祉法人。補い合うウィン・ウィンの関係にあるが、効果はそれを超える。手間をいとわない障害者の仕事は付加価値の高い農産物を生み、自然と生きものにかかわる農作業は、障害者に癒し効果をもたらす。持続可能な社会のモデルを農福連携の現場に見た。

本誌編集部
特別取材班

障害者の笑顔あふれる職場

厨房を覗いて驚いた。皿にご飯を盛る人、カレーを盛る人、下げられた皿を洗う人。耳の聞こえない「ろう者」たち7人が忙しく立ち働いている職場は、だれもが笑顔で明るい。静かなのに、にぎやかな雰囲気があふれているのだ。

京都府の南部、京田辺市内にある就労支援事業所「さんさん山城」のカフェでカレーライスを食べた後、施設内を見学したときのことだ。この施設は、社会福祉法人・京都聴覚言語障害者福祉協会が2011年に開設した。

「さんさん山城」を利用する障害者は、ここで働いた対価として工賃をもらっている。登録している利用者は32人いて、8割は耳の聞こえない、聞こえにくい「ろう者、難聴者」で、残りの2割は耳の聞こえる「精神障害者」や「知的障害者」だ。毎日通ってくる人もいれば、半日だけや週に1回半日だけ働く、という人もいる。

この施設の特徴は、作業の大半が農業に関わっていることだ。お茶や野菜などの農産物を生産し、みずからお菓子などに加工して販売、農産物を調理してランチを提供するカフェも運営している。福祉作業所などでよく見られる「箱折り」や「シール貼り」のような内職的な作業は引き受けていない。

開設した11年当初から「農福連携」を掲げていたわけではなかった。「さんさん山城」の責任者である施設長の新免（しんめん）修さん（44歳）は、「15年に農福連携に先駆的に取り組むモデル事業所の一つとして農林水産省から選ばれて、初めて自分たちのやっていることが農福連携と呼ばれることを知った」と言う。

17年、近畿農政局の第1回・近畿「ディスカバー農林漁村の宝」に選定され、全国に知られるようになった。19年6月には、韓国・済州島で開かれた「第1回持続可能な開発目標（SDGs）済州国際会議」に、利用者と職員17人が招かれた。

付加価値の高い農作業を実現

「さんさん山城」で農作業を担当する管理者の藤永実さん（67歳）によれば、開設当時のいきさつはこうだ。

社会福祉法人は、聴覚障害者の支援ができる拠点づくりを模索していた。たまたま、統廃合で使われなくなった京都府京田辺市の農業研究所の施設を借りることができた。京田辺市は都会とはいえ、農地が残り農家もがんばっている。

「施設を利用する障害者が地域の一員として活躍するには、地域の産業である農業にかかわる仕事がいい」

そう考えていたところに、高齢で茶畑の経営をやめざるを得なくなった宇治茶の生産農家がいることを知った。高級な宇治茶の生産に欠かせないのは、機械を使わず人の手で茶葉を丁寧に摘み取る作業だ。障害者施設には「人手だけは、たくさんある」。茶園を借り受け、茶園の仕事を継承することから、「さんさん山城」の作業は始まった。

15アールほどの茶園での収穫は、機械なら1日で終わるが、「さんさん山城」では手摘みで10日もかける。「生産効率が悪い」ともいえるが、「仕事が丁寧」なのだ。

「さんさん山城」のメンバー。宇治茶の葉を手際よく手摘みする=京都府京田辺市にて

収穫した茶葉は農協に出荷しているが、地域の手摘みの平均落札価格よりも高値で取引されている。耕作放棄地になるはずだった茶園を再生させただけでなく、付加価値の高い高級宇治抹茶を生産できるまでになった。5月の茶摘みの時期になると、利用者たちは毎日黙々と茶摘みをし、ボランティアで参加している健常者を障害者が指導するという光景が見られる。

「さんさん山城」は、京野菜として知られるエビイモの生産に乗り出した。収穫に人手のかかる作物なので、働き手が多くいる障害者施設の優位性を生かせる。いまでは約50アールの農地を借り、同じく京野菜の万願寺トウガラシや京田辺市のブランド野菜である田辺ナス、タカノツメ、ダイコン、コマツナなど、季節の野菜も生産し、栽培する農産物の種類が増えた。施設の裏には立派な農業用ハウスも建てた。

農業は第一次産業といわれるが、「さんさん山城」ではそれを加工する第二次産業、販売する第三次産業と、仕事のすそ野が広い。国産のタカノツメは希少で、京都市内にある老舗の香辛料メーカーに納品し、高級七味唐辛子に加工してもらっている。エビイモは高級食材として農協に出荷している。規格外のものは加工品にして活用している。

さらに、2017年6月から施設内にコミュニティカフェを開設した。週に4日程度の開店で、「田辺ナスカレー」「エビイモ豚汁定食」など、ワンコイン（500円）の日替わりランチが人気だ。昨年10月には開店から2年4カ月で来店客数が2万人を超えた。

できる仕事と居場所がある

障害者はなぜ農業に向いているのか。新免さんや藤永さんは「仕事に広がりがあるから」と思っている。お茶の葉を摘む農作業、手摘みの高級抹茶をふんだんに使用して「濃茶クッキー」や「濃茶大福」などを製造する作業、イベントの模擬店などでの販売作業、さらにはカフェで調理をしたり接客するなど、六次産業化した農業には、さまざまな種類の仕事がある。

施設を利用する障害者には得手、不得手があるものだが、作業の種類が多いので、誰もがそのどれかを担うことができる。また、作業にプレッシャーやノルマがなく、自分のペースで進めていけるのも農業の強みだ。

「さんさん山城」は、さまざまな模擬店で濃茶クッキーや七味、エビイモコロッケなどを販売しているが、生産にかかわった障害者を必ず連れて行き、自分で直接接客してもらうことにしている。障害者を連れて行かない事業者が多いなかで、なぜ障害者を販売の前面に出すのか。「自分たちが作り加工した商品が、お金になる現場を体験してもらいたいからだ」と、新免さんは語る。自分のした仕事の成果を実際に体験することで、障害者たちのやる気は、がぜん向上する。

小学4年のときにいじめられて以来、引きこもっていたAさん（29歳）は、5年前から「さんさん山城」に通い始めた。当初は対人恐怖症の一面もあったが、「さんさん山城」で働く喜びを

知った。「いまでは濃茶クッキーづくりのエース。彼がいないと仕事が回らない」と新免さん。居場所が見つかり、自身の存在が周囲に認められたAさんは、いまではいつも笑顔がたえない。

ろう者のB子さん（27歳）は、軽度の知的障害もあり、5年前に通い始めたころはよく泣いていた。しかしここで働くようになって自分が必要とされていることを知り、それから積極的になった。いまではカフェで開店前の準備から掃除、皿洗いなど、なんでも上手にやれる。機転が利き、職員に仕事の指示をすることもある。

施設に通う障害者たちの変化に、藤永さんは「びっくりしている」と言う。

新免さんは「『障害者でもできる仕事』ではなく『さんさん山城だからできる仕事』がここにはある。ご夫婦で農業を営む農家では人手が足りずできないことが、さんさん山城ではできる。そんな仕事を追求している」と語る。

「障害者は支援を受ける存在とは限らない。地域を支える一員として活躍している。それをもっと社会に知ってもらいたい」と語る。

福祉の課題をビジネスで解決

障害者は地域社会の一員であるという話は、鹿児島県内の農業法人でも聞いた。薩摩半島にある南さつま市の株式会社南風（なんぷう）ベジファームを訪れた。

漬物の生産、販売を手掛けていた創業者の秦泉寺（じんぜんじ）弘さん（45歳）が、原料となる野菜をみずから生産するため、2012年に設立した農業法人だ。いまでは自社農地5・5（ヘクタール）、地域農家への委託生産分を含めると10（ヘクタール）で、赤シソやウメ、ダイコン、ホウレンソウ、ラッキョウ、カブ、ジャガイモ、それにコメを栽培している。

秦泉寺さんには忘れられない障害者との出会いがある。鹿児島市内で細々とやっていた野菜の浅漬け工場が手狭になり、南さつま市の工業団地の工場を買収して間もない14年のことだった。

業容を拡大したくても、人手不足がネックだった。求人をしても応募者は来ない。やっと来た応募者のなかに、ボロボロになった履歴書を持っている者がいた。聞くと、もう何十社にも応募したがどこも雇ってくれなかったという。知的障害のある人で、履歴書がボロボロなのは、何回も使いまわしていたからだった。

雇用主は一般に、健常者を雇いたがる。たとえ障害者であっても、障害の程度の低い人に来てもらいたいと思うのが常だ。その気持ちはわからなくもないが、それでは障害者の就労の場は広がらず、障害者の支援にならない。一方の事業者側も、人手不足は解消できず事業の展開がままならない。

秦泉寺さんは、ボロボロの履歴書を見て、決断した。「福祉の課題をビジネスの手法でもって解決してみせよう」。秦泉寺さんは、みずからにそんな使命を課したのだ。障害者の活用に踏み切った秦泉寺さんは、職員を福祉施設に派遣し研修させ、1年後の15年、就労支援事業所である「南風（なんぷう）・i（あい）」を開設した。

農福連携がブームになっているから始めたのではない。農作業や食品加工の人手が足りず、事業の継続には、障害者の力に頼らざるを得なかったからだ。秦泉寺さんには確信があった。障害者は働けないのではなく、雇用主側が工夫すれば、十分期待に応えてくれる。

「数字が苦手な障害者には、数字を扱わない作業をしてもらう。記憶力の低い人には、目の前に数字を書いた旗を立てておけば忘れない。弱点をなくせば、その人はもはや障害者ではなくなる」。そうすれば、障害者は事業所にとって十分な戦力となり、ビジネスとして成り立つ。障害者にも地域社会の一員として活躍してもらえるのだ。

六次化で障害者の働く場を

「南風ベジファーム」で働く障害者は、いまでは45人にのぼる。就労支援事業所には、障害者と雇用契約を結ぶ「A型」と、障害者が雇用契約を結ばず、作業の対価である工賃をもらって働く「B型」がある。「南風・i」には、A型が18人、作業の対価をもらうB型が27人いる。ほかに正社員が8人、パート従業員が14人いて、合わせて60人余りで、売上高2億3000万円の事業をこなしている。

かつては農業法人が福祉事業も営んでいたが、福祉事業を強化するため分社化し、20年1月に非営利一般社団法人である「南風」を設立。農業法人がそこに農作業や加工作業を委託するかたちをとっている。

「南風」に通う障害者の数は、鹿児島県内では多いほうだ。なぜ、障害者に人気があるのだろう。「作業の種類が多いことが一因」と秦泉寺さんは

言う。「一つの作業しかなければ、その仕事が苦手な人はそこで働けなくなってしまう。ここではさまざまな作業があり、一日の中で変わることもできる」

収穫した赤シソの葉やダイコンを洗う作業、それらの野菜を切る作業、ジャガイモをゆでる作業、惣菜のポテトサラダをつくる作業、あるいはベビーリーフの葉を摘む作業など、障害者が得意とする仕事は、農業やその加工にかかわるなかで、どこかに一つ見つかるものである。

「南風ベジファーム」は5月、工場の一角にカフェをプレオープンする。工場でつくった惣菜をメインとしたランチを提供する。また、施設の利用者の送迎に使っているバスが、昼はあいているため、「買い物弱者」といわれる地域の高齢者を、市内の生協の店に送迎する事業も始める。

高菜の収穫に精を出す「南風ベジファーム」の障害者たち＝鹿児島県南さつま市にて

働き手が多いという強みも、「南風ベジファーム」は生かしている。焼酎用のイモを12㌶も栽培していた大規模農家が、高齢化で続けられなくなった。収穫などは機械でできるが、苗を植える作業は人手にどうしても頼らなければならず、できなくなったからだ。それを聞いた秦泉寺さんは、施設の利用者である障害者を10人余り連れてイモの苗を植える作業を請け負うことにした。毎年手伝ってくれるならと、息子さんが農業を継いでくれることになった。農福連携が、地域農業の崩壊を防ぐのに一役かう事例となった。

多様な人々の個性生かす社会

農福連携は農業サイドから見れば、労働力の確保であり、福祉（障害者）サイドから見れば、障害者の就労先の確保である。鹿児島の「南風ベジファーム」は、漬物加工から農業に進出する際の労働力として障害者を採用した。ビジネス拡大には障害者のさまざまな個性を生かすしかなかったが、それには多様な作業の広がりの見込める農業が役に立った。農業には、障害者の居場所と出番があるのだ。

一方、京都府の「さんさん山城」は、たまたま廃業する茶園の経営を引き受けることで農業との縁ができた。やはり作業の幅の広い農業が障害者の居場所をつくり、彼らに生きがいを与えた。人間だれしも、他から必要だと期待され、感謝され存在を認められると、心地よいものだ。障害者も同じだ。

「南風ベジファーム」の秦泉寺さんは、こう説明する。「ここに段差があり、障害者が通れないとする。足の不自由な障害者に問題があるのか。そうではなく段差に問題があるのだ。段差を解消すれば、その人は障害者でなくなる」

畑で種をまき、双葉が出て、やがて大きく育つ野菜を日々観察することで、障害者の心はなごむ。言葉を替えて言えば、障害者たちの居場所が必ず見つかるのだ。

「園芸療法」といわれる取り組みがある。野菜や草花、樹木を育てることを通して、私たちの心身を癒す療法である。障害者ならずとも私たち現代人は、仕事上や人間関係などで、さまざまなストレスを抱え込んでいる。作物や草花を育てる作業は、人間の五感を刺激する。自然の中で農作業は、ストレスホルモンを減少させ、心を癒してくれるのかもしれない。

農福連携の職場を見てきて、次のことが明らかになった。多様な人々のそれぞれの個性を伸ばして働ける場が農業にはある。農業に居場所が見つけられるのは、障害者に限らないのではないか。女性であるか否か、高齢者であるか否か、外国人であるか否か。さまざまな個性を持つ多様な人々に、農業は活躍の場を提供できるのではないか。作業の広がりが大きく自然とのかかわりで生産活動を営む農業に、持続可能な社会のモデルを見出すことができるのかもしれない。